

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 63
2017年2月



▲名誉殺人から救われた男の子（ベツレヘム・「飼い葉桶」乳児院）人には望まれなくても、神から望まれて生まれてきた尊いのち。

世界は激動の時を迎えるかもしれません。自国第一主義やポピュリズムなどの不安定要素が各地に台頭しつつあります。またアメリカのイスラエル寄り政策によって、イスラエル・パレスチナ紛争もますますこじれる可能性があります。

それでも明るいニュースがありました。パレスチナがバチカンから「国家」として承認され、フランシスコ教皇とアッバス議長が今年1月14日、在バチカン大使館の新設を発表したのです。教皇は、イスラエル・パレスチナの二国家共存を支持しており、暴力の連鎖を一日も早く収束させるために、直接交渉が再開されて「公正で恒久的な平和実現の道」が見出されることを強く望んでおられます。

私たちのNPOにできることは？ 敵対国の若者に一人でも多く「人間」として向き合い、「平和をつくる」体験をしてもらうことです。今年も「平和の架け橋」プロジェクトを実施します。皆様もどうぞ私たちに力をお貸し下さい！

理事長 井上弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウントビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 **Email** ispalejpn@gmail.com **TEL/FAX** 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

A地区、B地区、C地区ってご存じですか？

～分断されたヨルダン川西岸地区～ 井上 弘子 (当法人理事長)

この不思議な地図をご覧ください。これは1967年「6日戦争」以来50年にも渡ってイスラエルによって占領されているヨルダン川西岸地区（以後、西岸地区）の複雑で不可思議な実情を示すもので、ここに住んでいるパレスチナ人たちの苦しみか推測できる地図です。



黄色の部分はイスラエル領土、真ん中のそら豆のような形をしている西岸地区と左下の海沿いの細長いガザ地区が、将来パレスチナの国土になる部分です。

二つ合わせても、約5800km²、日本の小さな1県くらいで、それがご覧のように、A、B、Cに細かく分類（分断？）されているのです。

濃い茶色 A地区：西岸地区の18%を占める濃い茶色の部分、イスラエル軍は一応撤退していて、行政も治安もパレスチナ暫定自治政府が担っています。エリコや、ラマッラ、ナブルスなどの大きい都市が含まれています。

薄い茶色 B地区：22%を占める薄い茶色の部分で、行政はパレスチナ、治安はイスラエルが権限を持っています。

白色 C地区：60%の白い部分で行政も治安もイスラエルが実権を握っています。

今回はとくにC地区のことをお話ししましょう。ここには、約30万人のパレスチナ人と125の入植地と約100の“前哨地”（注1）に住む33万人のイスラエル人入植者が住んでいます。

注1：将来の入植地建設の拠点とするために、入植者が当局の許可を得ずに、勝手に土地を占領し、バラックを建て、農地を開拓している場所

C地区は、入植地の安全と拡大のため、軍事演習地や水資源確保および経済的な利益のためにA

地区とB地区を取り囲むように設定されており、西岸地区そのものを細かく分断しています。しかも水道、電気、ガスなどのインフラも整備されておらず機能しないので、日常生活での不自由を強いられています。家屋や建物の建設も、井戸掘りも、道路整備もすべてイスラエル軍当局の許可が必要です。土地接収のために、「建築許可がない」という口実で破壊される家屋も少なくありません。そもそも建築許可はまずもらえません。その上写真のように道路がコンクリートや石などでブロックされていたり、さらに検問所や壁があちこちにあたりるので、2801の市町村が分断されており、近隣の村や町との行き来も難しいのです。働きに行くにも、学校へ行くにも、親戚に会いに行くにも大変な困難を長年強いられている人々と、増加しつつある入植者との争いや小競り合いは、この地域ではめずらしくありません。

最近起きた事件をいくつかご紹介します。

* 集団的懲罰：昨年末、一つの入植地で明らかに放火とみられる火事があった。その後イスラエル軍は近隣のパレスチナの村、デール・ニツァムに集団的懲罰を与えるために、巨大な石で道路を封鎖し、パトロールを強化して3日間村の出入りを禁止した。まだ犯人は特定できていないし、この措置も非公式のものである。

* 17歳の少年の死：12月、ラマッラ近くのペイト・リマ村でアハマド・ハゼムは26歳のもう一人の青年と共に銃撃された。アハマドは死亡、青年は重傷である。イスラエル軍の週に1、2度の急襲の時のことだった。青年たちは数人で石を投げて抵抗していた。この投石による被害はなかったのに、発砲は正当化されないのだが。青年たちは催涙ガスや実弾による反撃が始まってからすぐに逃げ出したが、グループの最後尾にいたアハマドは被弾して命を落としてしまった。

* “家屋”破壊の新しい波：この地域ではイスラエルによる土地の“国有化”を目指した接収政策がここ数年強化されてきた。しかし、今年になってそれ



▲破壊された我が家を前に呆然とたたずむ子どもたち。



▲村を封鎖するために道路に置かれた巨大な石。



▲家屋破壊の時に、野外に放り出された家財道具。

いずれもイスラエル人権団体 B' Tselem より

が加速し、1月だけで73の住居、51の建物が破壊され、161人の未成年を含む284人のパレスチナ人がこの寒空に行き場を失っている。しかも、この人々のために人権団体が建設した急ごしらえの家屋さえもすでに37戸も壊されている。

このようにC地区に住むパレスチナ人たちは経済的にますます貧しくなり、自立できずに、援助に頼らざるを得なくなります。こんな環境が子どもたちに、深刻な悪影響を及ぼさないはずはありません。いつも犠牲になるのは子どもたちです。学校へ行か

れなくなったり、心理的に非常に不安定になって攻撃的になったり、夜尿症になったり……心の傷は計り知れません。

この子どもたちに、安心と夢を与え、未来への「平和の希望」を与えるには、どうしたらよいのでしょうか？ 私たちに何ができるのでしょうか？

早急にイスラエル・パレスチナ双方の直接交渉が再開され、一日も早く、占領政策の終止符が打たれることを祈ります。正義と公正に基づいたイスラエルの安全とパレスチナの人権が保証されない限り、この地に平和は実現できないのです。

「トランプ時代」の中東はどなる

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

米国の大統領選挙でトランプ氏の当選が決まったとき、「まさか」の事態だったかどうかが暫く議論されました。「予想外」と受け止めた人たちの思いの多くは、人種差別や女性蔑視といえる暴言を吐く人物が当選するはずがない、あるいは当選してほしくないというものだったでしょう。いずれにせよ当選してしまったトランプ氏の外交政策がどうなるのか未知数ですが、私たちに関心の深い中東問題にどうかかわりそうか、選挙戦中の発言やこれから政権を担う要人たちの人選など、報じられてきた情報をもとに考えてみます。



まず、イスラエル・パレスチナ問題に関して、トランプ氏は「親イスラエル」を鮮明にしています。それははっきり示しているのが、イスラエルによるヨルダン川西岸でのユダヤ人入植支持と、在イスラエル大使館のエルサレムへの移転方針表明です。

1993年にイスラエル占領地のヨルダン川西岸とガザ地区にパレスチナ自治を実現することが合意されました（オスロ合意）。一定の地域で自治を始め、和平交渉を進める中で自治領域を広げていくというものでしたが、西岸・ガザ両地区を合わせた面積のうち、パレスチナ側が自治権を握っている領域は45%にすぎません。それも、約6%の面積のガザ地区はイスラエルとの境界を電気柵で囲まれ巨大な刑務所に例えられる状況にあり、西岸の自治領域でも半分以上はイスラエル側に警察権を押さえられたまま。自治拡大が進まない状態が20年続いています。

入植推進を支持

自治拡大を妨げている障害の一つがユダヤ人入植地の存在です。占領地への入植は、ジュネーブ条約という国際法で禁止されているとしてパレスチナ

側が強く反発しているものです。イスラエル側は、西岸を占領地とは見ず入植活動は違法ではないと主張していますが、国際社会では多くの国が不法な入植と批判しており、昨年12月には国連安全保障理事会が、イスラエルの入植活動の即時停止を求める決議案を採択しました。

この決議で興味深いのは、入植非難決議には拒否権を使ってきた米国が棄権して、決議案が通るのを黙認したことです。オバマ大統領はイスラエルの入植活動に批判的で、ネタニヤフ政権とは冷えた関係になっていました。

これに対し、トランプ氏が駐イスラエル大使に指名したフリードマン弁護士は、イスラエルによる入植推進を支持する立場です。イスラエル政府は1月24日、西岸の入植地に新たに2500軒の住宅建設を承認しました。ネタニヤフ首相がトランプ大統領と電話会談した直後のことです。またエルサレム市当局も、占領地である東エルサレムの入植地に500軒余の住宅建設を承認しています。1月22日、トランプ氏の大統領就任直後のことでした。

エルサレムの地位

エルサレムといえば、トランプ氏は選挙戦の最中から、現在テルアビブにある米国大使館を、イスラエルが首都と宣言しているエルサレムに移すと表明していました。エルサレムをめぐるのは、パレスチナ側も東エルサレムを将来のパレスチナ国家の首都とする方針を示しています。また、オスロ合意でもエルサレムの地位については和平交渉で決めるとしています。このように地位が定まらないため、大半の国が大使館をエルサレムではなくテルアビブに置いています。パレスチナ自治政府のアッバス議長は、米大使館がエルサレムに移転すればオスロ合意で認めたイスラエル国の承認の取り消しを検討すると表明。国際社会も和平の基本条件を壊すものとして強く懸念しています。

パレスチナ問題のほかにネタニヤフ政権がオバマ政権と対立した問題としてイランの核開発をめぐる合意があります。2015年7月にイランと欧米6カ国との間で、イランが核開発を抑えるのに応じて欧米

による対イラン経済制裁を軽減する核合意を結びました。ネタニヤフ首相は、この合意でイランの核開発を防ぐことはできないと反対。トランプ氏も反イランの姿勢を明らかにしています。次期国防長官に指名したマティス氏は対イラン強硬派と言われ、中東地域を統括する中央軍司令官を務めていたとき、イラン政策でオバマ大統領と意見が合わず解任されたと言われた人物です。

もっとも、トランプ政権が中東への対処で協調しようとしているロシアは、シリア介入をめぐるイランと協力関係にあります。オバマ政権時代は、ロシアが2014年のウクライナの内紛に武力介入し、ウクライナ領のクリミア半島を強引にロシア領に組み入れさせたことで経済制裁を科すなど、ロシアとの関係は冷え切っていました。ロシアとの関係改善を図ろうとするトランプ政権は、イラン敵視と親ロシアという矛盾にどう対処するのかと注目されています。

和平交渉に無関心？

アメリカ第一を唱えるトランプ政権は1月20日の大統領就任式直後のホワイトハウス声明で、外交政策の最優先目標として「イスラム過激派テログループの打倒」を掲げました。イスラム国（IS）や類似のテロ組織を破壊することが第一というわけです。そのためにどう行動していくのかはまだわかりませんが、はっきりしているのは、シリア内戦には不介入ということと、イスラエル・パレスチナ和平交渉促進を仲介する意向は当面ないということです。

シリアをめぐるのは、トランプ氏が当選直後に「内戦不介入」の姿勢を打ち出したとたんに、反体制派の拠点アレッポをロシア軍が猛攻撃し、シリア政府軍による制圧を可能にしました。1月24日に行われたアサド政権と反体制派の和平協議はロシア、トルコ、イランの仲介で進められ、米国抜きでした。

イスラエル・パレスチナ和平をめぐるのは、トランプ氏は1月22日のネタニヤフ・イスラエル首相との電話会談で、両者が直接交渉することによってのみ進められる、という考えを表明しています。これは、二国家共存案に沿った交渉を促す目的で1週間前に

パリで開かれた中東和平国際会議に対し、イスラエルと同調して否定的な回答をした形です。これまで米国は同盟国イスラエルの肩を持ちながらも、中東和平交渉の仲介という重要な役割を果たしてきましたが、米国第一のトランプ政権の視野に、中東和平は重要課題として入っていないようです。優先目標に掲げた「ISその他イスラム過激派の壊滅」のためには、イスラエルとの軍事、情報収集などでの緊密な協力の方が重要、ということなのでしょう。

トランプ氏にとっては、過激派テロ組織さえ封じられれば、シリアで反体制派がどういう状況に置かれようが、パレスチナ人が国を持たない状態が続こうが、重要でないようです。もっとも、「悪を取り除く」と言わんばかりにイラクに侵攻し破綻国家

に追い込んだような、余計な介入をしないのはいいことだという見方もあります。大国にはどうかかわってもらうのがいいのか、答えは簡単には見えてきません。

はっきり見えることは、イスラエルが米国の後ろ盾を得て一層強い立場に立つということ。その優位を、入植活動を強めるなど和平の環境をさらに厳しくする方向に使うとしたら、パレスチナ側の絶望が深まり、危険な状況に向かう恐れが強まるでしょう。



「スタディ・ツアー」に寄せる思い

3月に実施する「スタディ・ツアー」、事前研修参加の皆さんに決意を語ってもらいました。



イスラエル・パレスチナ青年
との対話

高田 結生

高校三年生の時に初めてイスラエル・パレスチナ問題について学び、それからずっと勉強を続けて、約3年が経ちました。勉強を進めるほどに、長い歴史の中で多くの問題が複雑に絡み合っていることが分かりました。これからどんどん解決が困難になるのではないかと思いました。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地であるエルサレム。三大宗教の聖地が同じ場所にある歴史的重要性についても、分かってきました。

スタディ・ツアーは、イスラエル・パレスチナ青年との対話がメインですので、両者の間をどう取り持てばいいか、自分なりに考えてみました。その時、どちらか一方に紛争の原因を押し付けることは、問題解決を考えるうえで適切ではないと思いました。彼らの現状を聴き、それに真摯に向き合うことが、第三者の立場として大切だと考えます。ツアーで会えるイスラエル・パレスチナ人とまず友だちになり、彼

らが心を開いて話してくれるように、自分自身も相手の立場になり問題を考えていくことを、私の目標にしたいと思います。そのために、出発までしっかりと勉強していきます。

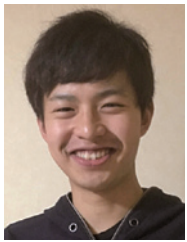


紛争に対する両者の意識の違い
佐田 さつき

第1回目の研修で、パレスチナ人およびイスラエル人のトークセッションがあり、彼らの間で紛争についての認識の差が大きいということを知りました。パレスチナ人は生活を制限され、特に2014年のガザ侵攻ではイスラエル人の30倍近くのパレスチナ人が犠牲になり、彼らの傷はとても深かったはず。対照的に、イスラエル人の中には分離の壁を見たこともない人もいて、この紛争についてそれほどシリアスに捉えているようには見えませんでした。さらに、「世界から忘れられたパレスチナ人」というフレーズを聞いて私はフランスで起きたテロ事件を思い出しました。たくさんの花が供えられて、Facebookユーザーのプロフィー

ル写真がフランスカラーになりました。しかしパレスチナのことには誰も気にかけてません。以上が今回の研修で1番印象に残ったものでした。

私は10月から中東の歴史や宗教や言語を勉強するために留学します。今回のイスラエル・パレスチナへのスタディ・ツアーは、より実りある留学生活のために、素晴らしい準備となると思います。現地の人々と交流し、彼らの思いを受け止めることによって、メディアや本では得ることができない多くを知ることができ、体験に基づいた新しい視点から中東を見ることができるようからです。



当事者の「語り」から見えたもの
東條 慎之佑

自分自身の肌身を通して現地の実情に対する理解を深めたい一心で、このスタディ・ツアーの参加を決意しましたが、この研修では、早くも現地の人々に対して一面的なイメージを抱いていたことを実感しました。実際に、イスラエル・パレスチナ両当事者のお話を聞いて、窺い知ることができたのは、紛争と敵対に明け暮れる凄惨な日々だけではなく、パレスチナの田舎のひなびた、のどかな暮らしぶりやイスラエルの多様な伝統的行事や文化といったポジティブな側面でした。

もちろん、この紛争は当地の人々にとって耐え難いものでしょう。ただ、私たちは一面的なメディアの情報の影響で、「不憫」や「可哀想」といった同情心を現地の人々に持ちがちですが、彼らの豊かな文化やメンタリティー、彼らの心の思いや希望も深く受け止め、イスラエルとパレスチナの実情を理解する必要性を感じました。

スタディ・ツアーでは、第三者の自分がどのようにこの紛争の解決に寄与できるのか、自分なりの解答を求めたいと思います。

イスラエル・パレスチナ問題の 複雑さに直面して

原田 直美



私は、中学生の頃から国際協力や紛争解決に関心を持っていました。そしてそれらを学びたいと大学へ進学しました。中東地域の文化や政治にも関心があったので、本を読んだり、イベントに参加するうち、イスラエル・パレスチナ問

題に出会いました。そこには政治・民族・宗教・外交などさまざまな問題があり、その根の深さに驚きました。それで、現地へ赴いて実際の人々の暮らしを見てみたいと、このツアーへの参加を決めたのです。

1月、第1回事前研修が行われました。私は、大学で勉強していましたが、学外でもそれに関連して活動してきたので、イスラエルやパレスチナの事を知ったつもりでいました。しかし、メンバーの皆と、平和とは何か、正戦は有りうるかなどディスカッションを重ねて、自分が一体イスラエルとパレスチナの何を知りたいのだろう、何がしたいのだろう、と色々なことが頭の中を巡りました。

これから私はツアーに向けて頭の中を整理し、この問題にどう向き合い、何のために現地へ赴くかを明確にしていきたいです。出発日までとにかく沢山勉強をし、ニュースを見て、備えようと思います。



五感を使って感じ、
考える旅に

阿部 遥

スタディ・ツアー参加者は、研修の2日間にそれぞれの知識や経験を持ち寄ってイスラエル・パレスチナ問題を考えました。私はいろいろ知れば知るほど、どうしたら平和に導くことができるのか、また自分に何ができるのか、分からなくなりました。ただ、研修では文化や人々の魅力も知ることができました。イスラエル人・パレスチナ人双方からのお話で、彼らの日常を垣間見ることができ、東京ジャーミー（イスラム教の礼拝堂）でのひとときではイスラム文化を肌で感じ、理解の一助となりました。また、研修中に教えていただいた人権団体のいろいろな

活動、とくに輸血作戦・電話作戦といった活動からは、多数派の世論や憎しみに流されず、未来を切り開こうとする人々の力を感じました。

研修を通して、イスラエル・パレスチナは長く複雑

な問題を抱えてきたことを学びました。現地では、そういった歴史を踏まえた上で、まっさらな気持ちと五感をもって人々や文化と触れ合い、現実をさまざまな方面から受け止めたいと思います。

ユースグループの活動について

恩地 明日香 (ユース・メンバー、プロジェクトとスタディ・ツアー参加経験者、現在社会人)

2015年に立ち上がったユース・グループは、現在社会人3名、学生1名の計4名で活動しています。主な活動内容は、当NPOの広報活動、交流プロジェクトのサポートです。

広報活動としては、これまで「イスラエル・パレスチナ料理を楽しむ食事会」、イスラム教を理解するための「モスク・ツアー」、イスラエル・パレスチナ問題の理解のための「映画会」などを実施してきました。延べ120名ほどの方にご参加いただきました。

交流プロジェクトのサポートとしては、日本でのプロジェクトやイスラエル・パレスチナ スタディ・ツアーのアイデア出しから始まり、参加者募集や事前・事後研修 まで幅広く行っています。「イスラエル・パレスチナの青年に日本で見てもらいたいものは?」「日本人学生に知ってもらいたいことは?」「プロジェクトの広報イベントは、どういった人をターゲット に?」などとミーティング毎に熱い議論をしています。

実は昨年の夏頃から、立ち上げメンバーの多くが学業多忙により、ユース・グループの活動が困難

になっていました。そこで、これまではボランティアとして参加していた社会人メンバーを中心に、もっと当法人を盛り上げることを目標に再スタートしました。

イスラエル・パレスチナの活動をしている団体といえば、当法人といってもらえるようになるために、まず広報活動を!ということで、様々なイベントを実施しています。年齢問わず、多くの方に楽しんでいただけるイベントをつくることをモットーに行っていますので、本記事をご覧ください。皆様もお気軽にご参加いただけましたら幸いです。

最後になりましたが、支援者の皆様、交流プロジェクトに参加した皆様、また理事の方々のサポートのおかげで活動できていることに感謝いたします。来年度からは全員が社会人となるユース・グループは、それぞれの持つ知見を活かし、当法人に還元していく所存です。また、社会人、学生問わずメンバーを募集し、お互いに支えあえるユース・グループを目指したいと思っております。今後とも応援をよろしくお願い致します

支援者の皆様へ:

もしこのユース・グループの活動に興味や関心がある学生や社会人をご存じでしたら、ぜひご紹介ください。

ユースメンバー募集中!

ユースグループは現在、社会人・学生問わず一緒にNPOを動かすメンバーを募集しております!

ミーティングは、毎週土曜日10:00~東中野の事務局で行っております。

ご興味ある方は、下記までご連絡ください。

(ispaleyouth@gmail.com)

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

学校と施設訪問で



上、右 いずれも「飼い葉桶」乳 ▲▶ 児院の子どもたち。

◀エフェタ聴覚障害児学院で。校長のシスター・ピエラとイスラム教の児童。



街で



▲ユダヤ教超正統派のお母さん。



▲アラブ特有の屋根付き市場の中のスパイスのお店。独特の香りがする。



▲屋根付き市場のおみやげのお店。(アッコーで)

友達と一緒に？



▲白いクリスマスツリーの前で3人の高校生。



▲エルサレム旧市街にて。



▲エルサレム旧市街、ダマスカス門近くの雑踏。近郊から来たおばちゃんたちの露天商。



▲ハイファでバイ教神殿 (世界遺産) の警備をする若者たち。



▲イスラエル兵士たちの一休み。この写真の数日後、ここで5人の兵士がテロの犠牲になった。



▲太鼓でお金を稼ぐエチオピアから来たユダヤ人兄妹。(エルサレム・シオンの丘)